

### 第三章 16) サンタ・ガブリエーラ耕地 (フランシスコ・シュミツ駅)

モジアナ線セルトンジーニョ支線リベイロン・プレート始発駅～ピタンゲイラ終点駅パーサジェン (パウリスタ線とセルトンジーニョ支線分岐点) この耕地はフランシスコ・シュミツ耕地の中でもっとも日本移民が配耕された耕地。



サンタ・ガブリエーラ耕地 フランシスコ・シュミツ駅



サンタ・ガブリエーラ耕地 セルトンジーニョ駅

(この耕地は先のフランシスコ・シュミツ駅でもセルトンジーニョ駅でも下車できた。)

\*パウミタール耕地 (セルトンジーニョ駅) 高山勝次、1914年、若狭丸 (「平野 25 周年史」)

\*南原春雄、1934年6月、アラビア丸、福島県相馬郡原ノ町出身、セルトンジーニョ入耕、後パウルー郊外で綿作、さらにアサイのトレスバラス移住地に入植。(ブラジル日系)

\*上原源栄、1936年12月、サントス丸、沖縄県島尻郡出身、パウミタール耕地に配耕、さらに転々として西部パラナ州シナ・ノルテに落ちつく。上原幸啓サン・パウロ文化協会々長伯父。  
(「ブラジル日系紳士録」860ページ)

\*ベラ・ビスタ耕地(ポンタル駅)重松治太郎、1913年、第二雲海丸(同)

\*サンタ・マリア耕地(セルトンジーニョ駅)佐藤見一郎、1930年4月、博多丸(同)

\*アパレシダ耕地(ポンタル駅)池田藤造、1913年10月、帝国丸(同)

\*同 今村権蔵、1913年、帝国丸、福岡県築上郡、23歳で渡伯(「ブラジル同胞活躍の姿」)

\*サンタ・ガブリエーラ耕地保坂啓太、1913年10月、帝国丸(「平野25周年史」)

\*鐘ガ江久之助、1913年 第二雲海丸、福岡県浮羽郡、妻シメノ、この耕地はマラリアの巣と呼ばれる、不健康地だったので家族全員が病んでしまった。耕地生活3年半続けて多少まとまった蓄財が出来たので、同線ボンフィン・パウリスタ駅付近へ移転。1915年7月31日久俊氏は長男として出生。久之助氏は鐘ガ江家の後継ぎであったので、一家を上げて帰国することになっていたが開拓に取り組み、ブラジル永住を決め実家を継がせるため6歳になったばかりの久俊を日本に行かせたのが1922年、そして1944年9月14日中国の地にて戦死(29歳)。(「蒼氓の92年」111ページ)

\*中島末雄、1929年1月、博多丸、熊本県八代郡竜北町字野津出身、セルトンジーニョ駅フランスコ・シュミツ耕地で義務農年終了後、サン・マルチーニョ耕地に移転。1934年レジスト口植民地に入植する。  
(「熊本県人発展史」719ページ)

\*清水益太郎、1929年7月、博多丸、熊本県八代鏡町下村出身、セルトンジーニョ駅付近に就労すること1ヶ年半後、ノロエステ線を経てブラ拓が分譲したチエテ移住地ペレイラ・バレット市近郊に入植して米、綿作に従事する。(「熊本県人発展史」555ページ)

(雑記)

全拓連では25の県拓連があり、7県の外の県より入植用地獲得の要望があり、モジガス河の対岸に1600アルケーレスの用地物色、第二のグアタパラを建設する予定で、コチア産組を通し用地買収交渉を進めまとなり、内地での資金調達の見途もついたが、資金の送金が認められず、グアタパラ満植後に考慮と釘をさされ頓挫する。これにはコチア産組も困り止む無く、鐘ガ江久之助氏に依頼する。瞬く間に一大米作農場を建設、1962年1月第1陣が入植した頃には既に2万俵以上の収穫を挙げるに至る。リンコン郡内のこの農地の一部は以前の東京植民地内に含まれる。(「前進」6ページ) またタウバテ市にもやはり1000アルケーレスの農場を当時所有しており、戦後大米作地で有名になった。この鐘ガ江農場が出来たのが1927年頃。  
(「移民の生活の歴史」223ページ)